

14年振りのソウルライフ

CMEO 事業部 稲垣 佐知也

はじめまして。Yano E plus 編集長の稲垣です。本来であれば編集長である私がコラム、という月刊誌に良くある「編集後記」なるものを執筆しなければならないのですが、私が所属するCMEO 事業部の事業部長である田村に長らくその役をお願いしておりました(その後も2名の同僚に執筆して頂きました)。

さて、私事ですが8月初旬より異動で弊社ソウル支社に赴任となりました。現在、ソウル市内の光化門近くのおフィスにて勤務しております。

私が初めて韓国に来たのは大学3年が終わった1995年3月下旬。大学の交換・派遣留学制度を利用し、1997年3月までの約2年間に渡って留学生活(延世大学)を過ごしました。当時はまだ「韓流」なるものは存在しておらず、韓国と言えば「焼肉」「キムチ」といった食べ物程度のイメージがほとんどでした。確か当時は「近くて遠い国」と言われており、食べ物以外の韓国に対する印象は「何となく怖い国」でした(民主化闘争など、闘争のイメージだけが合ったんだと思います)。そのため、多くの日本人の友人・知人からは「なぜ韓国?」といった質問を良く受けたものです(今でもそうですが。。。)。

なぜ韓国か?正直に話しますと、最初はこれといった大義名分は無く、大学2年生時に行った半年の米国留学で異国への興味を更に持つようになり、「とにかくもう一度、学生中に海外で生活したい!」という気持ち(下心)が大半だったと思います。

ただ、韓国に対するイメージは上記程度であったものの、「日韓関係の悪さ」「韓国人は日本(人)をそんなに嫌いなのだろうか?」「在日韓国人ってなぜ差別をされているのだろうか?」といった漠然とした疑問は心のどこかで長年持っており、「じゃあ、実際に韓国人に聞いてみよう」「となれば、韓国語を勉強しなければ!」ということで、「教授達のウケの良い答えを何か探さないと」もともともらしい面接用の答えを周到に準備し、首尾よく合格したわけです。

実際、韓国で過ごした2年間は楽しいものでした。韓国人の情の深さ、やさしさ、活力、まじめさ等を感じました。もちろん、「嫌な思いをしなかった」とは言えず、時間にルーズだったり、適当であったり、マナーを守らなかつたり等、顔をしかめたくくなるような事も多々ありました。。。

しかし、最も驚いたことは「韓国人は日本人以上に日本について良く知っていること」でした。韓国語をある程度話せるようになると、様々な質問を度々受けていたのですが、正直まともに応えられませんでした。米国に留学した時も気付いてはいたのですが、韓国に来て、自国について知らない自分に改めて気付かされたのです(現在も知らないことだらけですが。。。)。日本に対する強烈なライバル意識を知らされたのもこの時でした(それ以来、日韓戦は特に気合が入ります)。

そんな「うぶな留学生活」から14年。再び韓国で生活することになりました。当時はまさかビジネスで韓国語を活用できる日が来るとは思っておりませんでした。感慨深いものがあります。とは言いつつも、韓国へは公私合わせて50回以上も往復しており、既に外国という意識も無いため、「異国での生活」という雰囲気がほぼないのも事実です（苦笑）。ただ、単なるビジネス出張と実際に住んでみるのとでは実際の生活の中で様々な違いがあり、そうした事柄にも徐々に気付いていくことになるのでしょうか。

皆様もご存知の通り、韓国にはサムスン、LG、現代といった世界レベルでの大手企業が存在しており、これまで日本企業が多くシェアを有していた部品、部材、素材市場においても存在感を増しつつあります。日本にとって有力なライバル国の一つと言えるでしょう。留学自体に受けた質問とは中身が違いますが、ビジネスとなっても日本に対する知識の深さ、興味の多さには驚かされますし、日本から学ぼう、盗もうという姿勢は失っておらず、こうした謙虚な態度も韓国企業を強くさせているのではないかと感じております。

今後、韓国企業の動向、韓国ビジネス文化といった話題について硬軟織り交ぜて？定期的にご報告できたらと考えております。

執筆者略歴：稲垣佐知也

2000年、榊矢野経済研究所入社。レーザーやLED、光通信用部品、レンズといったオプトロニクス分野、コンデンサ、PCB、水晶デバイスなど電子部品など、エレクトロニクス関連の部品市場に関して一貫して調査研究を実施。近年はリチウムイオン電池を中心にエネルギー関連の調査をメインに担当。